



## 特集

# 会報「季刊・エブオブ」100号記念 鼎談

●司会：編集部

会報「季刊 エブオブ」はおかげさまで記念すべき100号の発行を迎えることになりました。節目の100号でこれまでのOWSの歩みを振り返り、今後の展望について考える機会とするため、長谷川博会長、横山耕作代表理事、高砂淳二副代表理事による鼎談の場を持つことにしました。

## ■100号までの軌跡

— 100号を迎えましたが、皆さんの想いをまずはお聞きしたいと思います。

**長谷川** よかったと思いますね。貴重な記録になりましたね。その時期、どんなことが起こって、みんながどんなことを考えたかってことがよく分かりますね。

**高砂** 100回分の中には、いろんな情報が詰め込まれているし、いろんな分野の先生方がいっぱい記事を書いてくださって。ここまで来ると貴重な情報になっているんじゃないですかね。

**横山** 行き詰まったことも何度もありましたけど、よく100回まで来ましたね。たくさんの方に協力いただいて本当に感謝です。OWSの財産になりました。

— タイトルのEbuchebe(エブオブ)もずいぶんなじんできたように思います。

**横山** エブオブはパラオ語でシオマネキなんですが、干潟の指標種ということで、倉田先生(故倉田洋二副会長=当時)が名付けてくれました。パラオ語の英語表記なので、最初はちゃんと読んでもらえませんでしたね。

— そういえば、98号の表紙写真がシオマネキでしたね。

**横山** あのシオマネキは、昨年(2025年)7月の太田川河口干潟(和歌山県)の調査で和田先生(和田恵次学術顧問)が発見したもので、和田先生から「エブオブの表紙にしたら」との一言で実現しました。

— まさにエブオブですね。それは新しい発見だったのですか？

**横山** この地域(南紀地方)初の記録ですね。見つけたのは

雌雄各1個体だけだったので、採集はしませんでした。和田先生が短報にまとめ、先日『南紀生物』に掲載されました。最近では調査成果の論文もずいぶん発行されるようになり、活動の成果になっていますね。

**長谷川** しっかり記録して、残すことが大事だから、論文にするのはいいね。

— あらためて誌面や内容についてはどうですか？

**横山** 最初の10年くらいまでは、会報だからということで、活動報告を自分たちで頑張って書いていましたね。その後、いろんな分野の専門家の方々に執筆いただくようになりました。安い原稿料で快く引き受けていただいて、ありがたかったです。長谷川先生と高砂さんの知名度と信用にずいぶん助けられました。

**高砂** 僕の拙い連載も、99回も載せてもらいました。その時々で気付いたこととか、知った出来事なんかも盛り込んでいるので、僕としても記録として残すことができよかったです。その中から抜粋してエッセイ集として出版もしているの、かなり多くの人に読んでもらってありがたいですね。

— 68号でようやくカラー化しましたね。

**横山** ずいぶん見やすくなりました。特集の図版とか、高砂さんの写真とか。こんなことならもっと早くカラー化しておけばよかったと思いますね。

— エブオブの今後についてはどうですか？

**横山** 自分たちの学びと問題提起をテーマにしてきたので、その意味では十分機能してきたのかなと思っています。国会図書館にも所蔵されていますし、ウェブサイトにある特集のバックナンバーも意外とたくさんの人に読んでいただいているようで、うれしいですね。OWSにとっては大事な情報発信ツールですから、今後も頑張って続けていきたいですね。



エブオブ創刊号表紙



エブオブ98号表紙



エブオブはパラオ語でシオマネキのことです

## ■NPOを取り巻く環境

—創立して27年。当時と今ではOWSも含めてNPOを取り巻く環境は変わりましたか？

**横山** NPO法が施行されたのがOWS創立の年だったので、OWSもすぐ申請しました。当時はNPOに対する社会の期待も大きかったんでしょうね。任意団体がどんどん法人化されて、しばらくは倍々に増えました。環境系は子育てや福祉、医療系などと比べると数も少ないし、規模も小さいと思いますが。

—今でもNPOの数は増えているのでしょうか？

**横山** NPO全体としては2017年頃がピークで、その後、申請より解散の方が増えて、今は、少し減少しているようです。数の面では曲がり角かもしれませんね。一般社団法人制度ができたことによって、設立が簡単な一般社団法人を使うところも増えましたので、NPOの減少はそれも関係しているかもしれません。

—OWSも海の環境NPOと称していますが、環境系NPOの動向はどのようなのでしょうか？

**横山** 定款に環境保全を入れている団体は2割強だと思いますが、特に増えている印象はないですね。もともと環境に対する支出というのは、対人への支出と比べると少ないですから、全体的にみると小規模の組織が多いですね。

**長谷川** NPOはそもそも、環境とか子育てとか、行政の手が届きにくい部分を補ってもらおうというようなことでできたわけでしょう？

**横山** そういう面も強かったと思います。ですから、行政の委託事業なんかを受けている団体は経営的に安定していると思いますね。ただそうすると、その事業に縛られてしまう部分も出てくると思うので、どうしても自分たちの独自性みたいなものが弱くなる面もありますよね。OWSはやるべきことを決めていて、助成金の活用や環境意識の高い企業さんの

支援を受けながら、やれる範囲のことをやってきたという感じですよ。

—NPOの課題は資金と人的資源やネットワークといわれていますがOWSはどうですか？

**横山** 資金面が厳しいのはどこも同じだと思いますが、OWSはありがたいことに「エブオブ」や「海のトークセッション（少人数の対話型講演）」などを続けてきたおかげで、いろんな分野の専門家の方と関係ができました。これまでに海洋ごみ調査、造礁サンゴ調査、砂浜海岸調査、藻場調査、干潟調査、魚類調査と実践活動につながりました。それとサンゴ調査や干潟調査で広範囲に拠点が増えたこともよかったですね。

—水中での調査はOWSの活動の特徴でもありますね？

**横山** 水中ごみ調査、サンゴ調査、藻場調査、魚類調査などの水中調査は、コアなメンバーにダイビングインストラクターやガイドが多かったので実現できましたね。それと大学や研究所の方と連携できたことで専門性の高い活動につながりました。

**高砂** さらに多くの方々に協力してもらえる状況になったんですね。気候変動の影響が予想以上に大きくなっていることを考えると、サンゴ調査や干潟調査でのこれまでのデータの蓄積なんかも、今後とても貴重なものになってくるかもしれないですね。

—私たち一般市民も専門の研究者と調査に関われることはとても意義がありますね。

**横山** そうですね。OWSのテーマでロゴマークにも入れたResearch and Educationの実践がようやく少しは形になってきたかなと思います。NPOが活動の核になることで研究者、企業、市民、学校などが連携しやすくなるんですね。参加者はもちろんですが、活動に関わる関係者にとっては、ものすごい勉強になっていると思います。それと各調査に協力いただいている研究者の方々、それぞれすぐく力のある方が多くて、しっかり成果を出せるようになってきました。最近の干潟調査や保全活動では、大学生のチームもコンスタントに参加してくれていて、頼もしいですよ。



73回まで開催した「海のトークセッション」(2003~2015年)

## 特集！太平洋ゴミベルト問題

1年間に111トン!!  
ミッドウェー環礁に漂着した  
大量の廃棄物、漁網



北に積み上げられた111トンにも及ぶゴミと漁網

### 鳥の死骸にもプラスチック

鳥の死骸にもプラスチックが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。



混入した大量の「プラスチック」

### これが「ゴミベルト」



鳥の死骸から大量のプラスチックゴミが！

鳥の死骸について調査したところ、プラスチックゴミが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。鳥の死骸にはプラスチックが混入している。

### 伊豆諸島からはアホウドリ保護活動の成果



伊豆諸島からはアホウドリ保護活動の成果



ミッドウェー環礁のコオキノタウウ(コアホウドリ)のヒナの死骸ほとんどの死骸からプラスチックが見つかる

エポブ創刊号の特集記事(2000年3月)  
モノクロのコピー機で手作り

## 海洋プラスチックごみ問題

エポブ創刊号はプラごみ問題で始まりましたが、振り返ってみるとどうですか？

**高砂** やっぱ海に関わっている人は早くからプラごみを見てきているので、世の中が騒ぎ出す前からちゃんとプラごみ問題を取り上げていましたね。それに、サンゴ保全についても目を向けたのが早かった。

**横山** プラごみ問題が取り沙汰され始めたのは、2015年のドイツのエルマウサミットあたりからで、その後、カナダでのサミットがあって、2018年ぐらいからようやく社会問題として話題になり始めましたね。プラごみ問題は、ずっとOWSの活動のバックボーンっていうか、常にあって。サンゴ礁に行ったら漁網が絡まっているし、干潟はプラごみだらけだし、どの海岸に行ってもね。だから、常に関係してる。

**長谷川** 僕も覚えているけど、海鳥調査の初めの頃、ヒナに足環を付けている時に、ヒナが胃の内容物を吐き出したものにプラスチックが混じっててね。親鳥が吐き出したものも巣の周りに落ちてましたけど、なんか人が知らないところで、野生の生き物にいろんな影響を及ぼしているなと思ってましたね。今、もう海鳥の9割以上がプラスチックを取り込んでいてね、プラスチックは化学物質を吸着するので、鳥の生理

系に影響を及ぼして、いろんな健康被害を起こしてるんじゃないかと思います。

**高砂** 僕もOWSができる前に、横山さんの仕事の関係でミッドウェーに何回か行く機会があって、その時に鳥の死骸から出てくるプラスチックを見て、「うわ、こんなことになってるんだ」と思ってびっくりしたんだけど、横山さんも同じように思ってた。それでしばらくしたら、飲みながら「ちょっと相談なんだけど」って、こういうNPOをやろうと思ってるんだけど、一緒にやってくんない？みたいなことを相談されてね。OWS設立のきっかけの一つになったのは、あのシーンかなと。

**横山** そうですね、ミッドウェーで見たあのシーンはほんとに衝撃でした。海の仕事が長かったので何かしなきゃって思ってたんですけど、あれで踏ん切りがつかしました。プラごみ問題はどんどん深刻になる一方ですが。

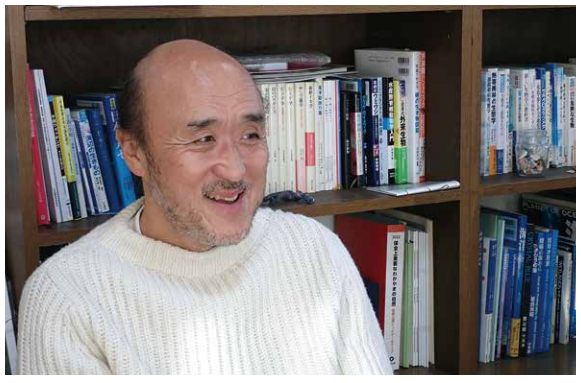
**長谷川** 今、いろいろ危機的ですよ。マイクロプラはさらに微細化して、海中だけじゃなくて、空中にも拡散してるって言いますね。人体にも食物と同様に小腸から取り込んで、血液の中に入って、脳にも蓄積されるっていうんだけど、亡くなった人の脳を調べるとすごい量が出てくるそうで、将来的にどんなことになるのか予想がつかなくて、非常に心配ですよ。

ープラごみの回収活動はずっと続けていますよね。2025年度はプラごみでクラウドファンディングにも挑戦しましたし。

**横山** はい。ただ回収活動を頻繁に広範囲にやるっていうのは難しいので限られた拠点でしかできません。だから他にも自分たちが撮った写真で写真資料展をやったり、水中のごみ回収グッズを作ったりね、プラごみを減らす普及啓発もいろいろ取り組んできました。

ー最近はこの団体とも連携することも増えてきましたね。

**横山** そうですね。昨年(2025年)12月8日にも人工芝の有



高砂淳二副代表理事  
「世の中が騒ぎ出す前からちゃんとプラごみ問題を取り上げていましたね」

害性を訴える公開書簡を経産大臣、文科大臣、環境大臣宛てに提出したんだけど、これはOWSも参加している減プラネット(減プラスチック社会を実現するNGOネットワーク)の14団体と135の賛同団体で出したんですね。OWSは政策提言とかロビー活動とか全く得意じゃなくて、そういうところは他の団体と連携して行動するようにしています。

長谷川 うん、そういうこともっとやるべきですね。

## ■ 個体数減少の危機、多様性の危機は今後

—今、長谷川先生を中心に6団体で「世界アルバトロスデー&シーバードウィーク」の取り組みも進んでいますね。

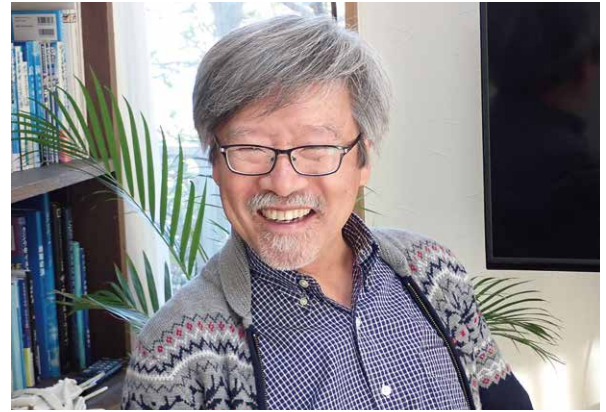
長谷川 2019年からですね。毎年6月19日が世界アルバトロスデーということになって、それをきっかけに日本でも絶滅の恐れのある海鳥の現状を多くの人に知ってもらって、できれば保護に関わってほしいってことで6団体が集まりました。コロナ禍で初めの2年間はオンラインの講演会しかできなかったけれど、これまでに6回、東京港野鳥公園のネイチャーセンターでいろんな人たちと協力してやってます。それもOWSの活動の一つ。2026年は6月21日の日曜日に講演をやって、その後、名古屋の劇団シンデレラと協力してオキノタユウ(アホウドリ)のミュージカルをやることになってます。

横山 ミュージカルは先生の監修でやるんですね。せっかく創るんだから、関西でも、名古屋でもぜひ続けて上演してもらって、広めてもらいたいですね。

長谷川 僕が話したのは、昔、オキノタユウが人間によっていっぱい捕獲されて、数が減ってしまって、一時絶滅したと。それをやっとな反省して、で、だんだん増えていったってような筋にしたらどうか、と提案したんですけど。

—仕上がりが楽しみです。オキノタユウの個体数の危機は脱したようですが、海鳥全体としてはどうなのでしょう？

長谷川 オキノタユウは今のところ安定して増えているから少し安心なんですけど、全体として見ると、この50年間ぐらいの間に、海鳥全体の個体数は、70%減ったっていう話なんです。最近でも、WWFの発表だと、海だけでなく陸



長谷川博会長「オキノタユウは今のところ安定して増えているから少し安心」

の生き物も全体として70%余り減ったと。だから、70年代くらいから人間の生活が便利になった一方で、地球上の野生の生き物が、本当にどんどん減ってきてしまって、海の生き物も結構影響受けてるはずですね。

高砂 温暖化で氷も減ってるから、氷に頼って生きる生物も減ってるし、氷に頼って生きる生物が減るとそれを食べていた生物も減ってしまう。悪循環が連鎖して、どんどんいろんな生物が影響を受けてますよね。

横山 サンゴ調査であちこちの現場に行っていて、今年もその話になったんですけど、いろんな所でサンゴも海藻も衰退気味なんですよ。藻場の衰退はどこもすさまじいので、多様性に影響しますよね。先生がさっきおっしゃった世界全体の種の衰退は、明らかになりに厳しい状況になっていて、それを回復させようってことで、最近「ネイチャーポジティブ」が取り沙汰されてますね。

長谷川 種を区別しなきゃいけないし、それからその個体数をちゃんと把握しないとダメだし、その分布状況を知らないといけないので、そう簡単じゃないですよ。それと、回復したのかしないのか調べないとダメだしね。

横山 2030年までの、あるいは2050年までの目標って言ってもね、そんなに簡単に変えられないでしょ。OWSが関わる現場では悪化してるっていう実感が強いので、複雑ですよ。



「世界アルバトロスデー&シーバードウィーク」もOWSの活動の一つ



横山代表理事「やっぱり現場での活動は大切にしたいですね」

長谷川 いっそ放置して10年ぐらい経ったら、かなり変わると思うけど。今、ヨーロッパでリワイルディングって言って、計画的に放置して、もともといた種をちょっと移入したりして、再野生化させるっていう取り組みをやってるよね。放置するだけでもかなり変わると。実際、三宅島の噴火の後、しばらく漁をしなかったら、結構、復活したっていうケースもあるからね。

## ■大切なのは自然との関わり 現場でしか分からないこと

横山 OWSに関わっている人たちは長谷川先生を筆頭に、やっぱり現場の人が多くわけですよ。現場の人って失礼な言い方だけど、要するにフィールドを大事にしてるっていう意味ですけど。

長谷川 いやいや、それは非常に大事で、理由が現場でしか分からんことがいっぱいあるんで。

高砂 うん。現場主義というか、自分の目で見て、それで発信するというね。

一海辺に実際に行行ってそこで知ること、学ぶことは大切ですよ。一方で海へ行く人が減っていると聞きますが。

横山 OWSの活動を説明するのに、海の自然と親しみ、学び、自然の大切さを伝えていこう、っていう表現をしています。海辺にでかけて、まずは面白がってもらう、興味を持ってもらうってことで、進めてきましたけど、残念ながら、家庭でも学校の中でもね、自然の中に入っているいろいろ楽しみながら観ていく、考えていくっていう感性がすごく薄れてるっていうか、海離れ、自然離れを感じますね。

高砂 僕も以前、宮城で写真展をしたときに、見に来てくれたお子さんがお母さんに、「海怖い!」とか話すのを聞いて、3.11の震災でそういう感じになってしまったんだなあと。防波堤とかも一気にできてね、それで海と断絶しちゃって。それまでは海浜学校とかやってたところもやめてしまっただけ。少し前のエブオブ(96号)に「人はなぜ海を見続けるのか」って話があったけれども、防波堤とかで断絶した感じがね、やっぱりすごい寂しいし、あの感覚はよく分かる。

横山 そうだね。ずっと感じていることだけど、海とふれあうことによって、情操を高められるとか、ストレスを軽減できるとかありますよね、昔から。海の青さを見るだけでもすごくいいみたいだね、そのあたりは続けていきたいですね。

高砂 森林セラピーが、確かに体にいいということが分かってきて、今、それに保険を適用する動きがあるらしいですね。今の段階では、費用補助などがあるようですが、その海版もあってもいいんじゃないでしょうか。海でのリトリートで補助金が出るとか。

長谷川 効果はかなりあるでしょう。緑とか、川とか自然に関わることでね。ちょっと見るだけでもかなり変わってくると



OWS三浦事務所から東京湾を望む

思いますよ。「ネイチャーフィックス」って本にも書いてましたけれど(『NATURE FIX 自然が最高の脳をつくる』フローレンス・ウィリアムズ著、邦訳2017年)、そういう取り組みをどんどん進めるようにすれば、人間として少し幸せになるはずだし。海を見るだけでももちろんいいと思うけど、匂いを嗅ぐとか、結構いいはずだと思いますけどね。

横山 そういう意味で、この三浦事務所にいると忙しくても気持ちにゆとりが出るんですよ。毎日違う海の表情が見えるのはやっぱりいいですね。それと、現場が近くなったので、これからもより地元に着した活動を広めていければと思います。

高砂 本当ですね。海が近くなって、人と海がつながる拠点になればいいですね。やっぱり、頭でいろいろと海のことを知っても、実際に海とふれあわないと心身の健康にもつながらないですからね。

一それでは最後に長谷川先生、今後に向けて一言。

長谷川 27年、時間がかかったけれど、少しずつ実績を積んできたという感じですね。これからはもっと愚直かもしれませんが、少しずつ前に進むしかないと思います。いろいろありましたが、そう突飛なことでもできないし、これまで通り続けていくこと、それが大切かなと思いますね。

一今日は長時間にわたってお疲れ様でした。



OWS三浦事務所にて